

# 實相寺花園会報 第201号

令和8年1月1日発行 発行所 臨済宗妙心寺派 實相寺・實相寺花園会

〒761-0450 高松市三谷町1811番地1 TEL087-889-3838 編集発行人 山本 文匡 <https://www.jissouji.net>

明けましておめでとうございます。  
本年もどうぞ宜しくお願い致します。

経営を鑑みると支出は極力抑えなくてはなりません。

さて現住職が就任した翌月の平成20年12月に「實相寺花園会報」第1号を発行して以来、ほぼ毎月欠かさず会報を発行し、おかげさまで昨年12月には200号に達しました。つまり17年間のうち3回だけお休みした訳でして、我ながらよく続けたものだと感じています。

しかしながら「人は世につれ、世は人につれ」というように、何事も変化するのが世の習いであり、諸行無常は真理でもあります。新たな年の始めに201号を発行するのも丁度キリが良いと思い、今号から体裁を大きく改めさせて頂きました。

実はこれまでの会報は「アドビ・イラストレーター」というパソコンソフトを使って作成していたのですが、これは大変高性能な反面、毎年8万円弱も使用料が発生していました。住職が使いこなせていたとは思いますが、なるべく見栄えの良い会報を出したい思いから使ってきた訳ですが、昨今の

そこでこの機に2025年10月から無料になった「アフィニティ」というソフトに乗り換えることにしました。ただこのソフトは縦書き設定が出来ませんので、このように体裁を大きく変更する必要があった訳です。

数ヶ月前から「体裁を大きく変更するなら1月号から」と考え、「ワード」や「一太郎」でも検討しましたが、ワープロはレイアウト上の制約も多く、躊躇していたのでした。段々と残り時間が無くなる中、大晦日に「アフィニティ」を使ってみたところ、イラストレーターで作成したテンプレートを読み込むことが可能で、「これならいける」となったのでした。

実はアフィニティの存在は少し前から知っていたのですが、「縦書きが出来ない」という先入観から、実際に使って検討していなかったのです。やはり何事も固定観念にとらわれず、経験することが大事だということを再確認した年末でした。

「小水（しょうすい）の魚（うお）に  
楽しみ有り」①

「はじめに」

昨年からお知らせしているように令和9年3月には妙心寺第二世の授翁宗弼（じゅおうそうひつ）禅師の650年遠諱を迎えます。それに伴い令和8年度は表題の「小水の魚に楽しみ有り」が花園会の年度布教テーマとなる訳ですが、少水の魚にどの様な楽しみが有るのか？を今月から法話という形ではなく、随筆的にゆる〜く紐解いていきたいと思います。

ただ結論めいたことを先に申し上げておきますと、「小水の魚の楽しみ」とは「あるべき自分であること」ではないかと考えています。これは昨年から住職なりに少しずつ思案してきた今現在の考えですが、2026年の日本社会に向けて禅が発信するべき内容であるとも感じています。

とはいえ、昨今は「べき論」や「〜らしさ」はともするとハラスメントと揶揄されますが、だからこそ御遠忌を機に、あらためて自分のあるべき姿とは何か？を世に問うてみたいのです。

「挨拶」

今年は珍しくお正月からお葬式があり、その際に感じたのですが、最近はお葬式や結婚式で喪主や新郎に成り代わって司会の方が挨拶されるケースが

増えています。慣れない人が挨拶するよりも、プロに任せた方が失礼がない、ということなのでしょうが、本来は当事者本人が挨拶すべきでしょう。何故ならそれがその人の力量を示す大切な機会だからです。

「挨拶」は『大辞林』にも「禅宗で、門下の僧と問答をして悟りの程度を知ること。」とあるように、もとは禅語です。漢語としての「挨」とは

「近づいて、迫る」こと。「拶」とは「圧力をかける、迫る」こと。漢和辞典の『漢字海』には【挨拶】アイサツ

①人々が押し合い、へし合いするさま。〈葛長庚・鶴林問道篇〉②{仏}禅僧が相手の境地を試みるためにさぐりの問いをしかけること。一挨一拶（イチアイイツァツ）。③国 人と交わす儀礼的なことばや動作。④国 返答。返礼。とあります。③、④は国語としての用法ですが、見知らぬ者同志が口を開けば、一言二言会話しただけでもその人と成りは自ずから現れるものです。

だからこそ「挨拶」は大切なのです。小さいお子さんでも、お客にキチンと挨拶出来るお子さんはそれなりの教育を受けたお子さんである場合が殆どですが、逆も又然り。ですからたかが挨拶、されど挨拶。「お里が知れる」のですが、実は「挨拶」には「属性」と「個性」が現れます。（続く）